

平成27年度 青少年問題調査研究会 第3回議事録

日 時：平成27年9月28日（月）14:00～16:00
場 所：中央合同庁舎第8号館6階623会議室

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付青少年企画担当

○司会 全国学力調査における福井県の子供の学力は全国トップクラスということで、かつ体力テストの結果であるとか、自尊感情の高さという点でも何と全国トップレベルということでございます。これは中公新書ラクレという本で御紹介をいただいていることなのですが、そこで今回は「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密～福井県の家と地域は子供とつながる・子供でつながる～」と題して講師からお話をお伺いしたいと思います。

本日は講師として、大阪大学大学院人間科学研究科講師の前馬優策先生をお招きしました。この後、早速講師の先生からお話をお伺いし、若干の休憩を挟んだ後、本日は座席の配置について、あらかじめ班ごとにグループ分けさせていただいておりますので、もしよければ班ごとに自己紹介であるとか、お名刺交換をしていただいて、講師の先生のお話を参考に各班での参加者御自身の御経験などを踏まえて、15分間ほどグループで意見交換のお時間を設けさせていただければと思います。

その後、意見交換で交わされた疑問であるとか、参加者御自身の経験を通じて会場全体に共有できる意見などについて、班ごとにどなたか御披露いただければと思います。

その後、また会場全体で講師の方と質疑応答であるとかをお願いしたいと思いますので、どうぞよろしくお祈りします。

なお、本日は講師の方の資料のほかに、福井県酒生地区青年グループさこう工務店という両面刷りの資料を配らせていただいておりますけれども、これは昨年度、内閣府のほうで青少年育成ボランティアの実態調査を内閣府で昨年26年度調査で使っていただいたのですけれども、その中で現場の中での特筆すべき取り組み事例ということで、福井県における青年団の取り組み状況について資料がございましたので、これもあくまで参考ということですが、意見交換のときの参考にさせていただければということで配らせていただいております。

それでは、前馬先生にお話をお伺いしたいと思います。よろしくお祈りいたします。

皆さん、こんにちは。大阪大学の前馬優策と申します。

今朝、大阪からやってきたのですけれども、どんな服装で来たらいいかなと思いつつ来て、結構暑かったので半袖で正解だったなと思いつついるのですが、今回、「福井県の学力・体力がトップクラスの秘密」ということでお話をさせていただこうと思いつついます。資料はパワーポイントをプリントアウトした形のもので8枚刷りなのですが、ここの中に入っていないスライドもございまして、見えにくいところとかは詳しく説明していきたいなと思いつついますので、そういう話があったら手を挙げるなりして、おっしやっていたら、ありがたいなと思いつついます。

それでは、早速始めていきたいと思いつついます。まずは自己紹介と書いたのですが、私自身は福井県とは何の関係もない人間でございまして、大阪の茨木市というところでずっと生活をしてまいりました。そういう人間が何で福井県のことについて話をするのだということをおのこの後、お話ししていきたいと思いつつ思うのですが、もともと学部時代から学力問題、特に学力格差の問題に関心を持っていて、量的な調査の分析であったりとかいうことをしながら、特に格差を縮めているような学校を効果のある学校と呼んで、そういった学校の特徴であるとか、どういうふうにしたら学力の格差は縮まるのかということをおのこの研究テーマとしてきました。

2007年に全国学力・学習状況調査。これは全国の小学校6年生と中学校3年生を対象にして、学力テストとアンケート調査を行うというのですが、そういうものが実施されました。今回、福井県の本と一緒に書いた大阪大学の志水宏吉という先生がいるのですが、その先生のグループで全国テストが実施されたことによって、学校現場とか、ある自治体の教育委員会とかはどのようなふうに変化したのかとか、変わったのか。現場に与えたインパクトについて実態調査をしようということをおのこの、2008年に全ての都道府県を分担して回って、教育委員会に聞き取りを行ったということがありました。

その中で福井県ももちろん、私はそのとき福井県には行かなかったのですが、話を聞いていて、福井県は学力とか体力とかが高いということがそのときも主立っていたのですけれども、自治体としての一体感とか一貫性とか、PDCAサイクルをすごく忠実に回しているとか、そういうことに非常に関心がありまして、福井県はどんなところなのかなと思いつつうになりました。

最初に、福井県はどのようなところかというイメージをお持ちの人も、そうでない方もいると思いつついますので、例えば、カニとか、景色がきれいとか、東尋坊とか、ゆく年くる年でよく鐘が鳴らされる永平寺なども福井県にあります。越前そばというおそばも有名で、福井県のそばはすごくおいしいのですが、もっとももっとたくさんいろいろありますが、こんなところですよ。

福井県は人口がおおよそ80万人ぐらいということで、都道府県単位で言うと非常に小規模自治体です。これがいろいろなところで、例えば施策などをしても隔々にまで行き渡るみ

たいなことを生み出しているのかなということも考えているのですが、こういう人口であります。

そのほかに福井県を示すような数値、細かい数値は載せていないのですが、例えば賃貸住宅の空室率が全国で一番高い。これは裏返せば、持ち家率が高いということともリンクするのですが、そういうことであつたり、コロッケ消費量とか、お惣菜の消費量が非常に高いということもおもしろい数値としてあらわれています。これは共働き率が高いということと恐らく関係していて、仕事を終えた方が買って帰って、お家で食事を食べるということにつながっているのかなと思います、こういう数値もある。

それだけではなくて、寺院数ですね。お寺の数が2位と非常に多いということも福井県の風土などをあらわしていると思います。仏教ということもそうなのですが、例えば檀家さんなどが非常にたくさんあつて、そういう地域のつながりなども恐らくこういうものの理由に思われます。

その下は労働に関するところですが、共働き率とか女性の就業率が高いというところで、一人当たりの労働時間が高いということになっています。

時々注目されることなのですが、法政大学でやっている調査研究の指標で幸福度指数というものがあるのですが、この幸福度指数が日本の中で一番高い県であるということが福井県の特徴かなと。

このほかにも例えば、中小企業の数とか就職率などは非常にいいというところで注目されることもあります、鯖江市の眼鏡とか、若狭小浜の塗箸とか、そういうのが伝統的にずっと福井がやってきたところなども有名です。

こうした福井県に何で行ったかということで、先ほど司会の方からも少し御紹介があつたのですが、学力が高いというだけではなくて、体力も非常に高いということが注目すべき事象であると言えらると思います。

これは全国と福井県を比べて、福井県の方が学力が高いですよということを示している数字にすぎないので、ぱっぱぱつと行きたいと思うのですが、小学校も中学校も非常に高いということです。学力などは特に秋田県とか、最近では石川県とかも高いということで注目されたりしていますが、福井県も2007年の段階から非常に注目をされていたという自治体です。

こちらの日本地図は、お配りしているのは白黒で少し見にくいかと思うのですが、小学校、中学校でも国語、算数と今年は理科の試験も行われたのですが、それぞれの正答率を全て平均して偏差値化して、それぞれ自治体ごとに色を塗ってみましたというものです。私が塗ったのではなくて、下に書いたサイトのところで紹介をされている、そういうインターネット上のサイトがあるのですが、これを見ると福井県とか北陸三県が非常に赤い地域であると。上の方が秋田県になりますが、日本海側の学力の高さが非常に注目されていて、この辺に何か共通点があるような感じもしていますが、これは追々お話ししたいと思います。

このテストは2007年に始まって以降、早い話が、全国のできる県、できない県、学力の高い県、低い県とあるとしたら、その差というのは非常にどんどん縮まってきているのも御承知で、皆さん、どの自治体も学力向上の取り組みなどを積極的に進められるようになりましたので、非常に全国平均でみんながぎゅっと縮まってきたという中で、やはり福井県は一貫して、ずっとトップにいるというところですよ。

ただ平均が高いだけではなくて、本当にすごいなと思うのは、福井県のすごさ、ちょっと分かりにくいかもしれないのですが、これは田中博之さんという方が以前に報告されたのですが、合計平均正答数、こちらは高い学校で、下側が低い学校と並べたときに、秋田県も学力から言うと同じように平均点は高いのですが、平均正答数の少ない学校も幾つか存在している。

一方で、福井県は平均正答数の少ない学校がある単位から下は全くない。この緑の下ですね。全くないということが非常に驚きをもって捉えられています。つまり、この年は非常にすごかったのですが、全国平均を下回った中学校がなかったという何例かが出ていました。これは本当に驚きというか、大体こういうのをやると県としてはすごく高くても、いろいろな学校がやはりありますので、ばらつきというはあるのですが、福井県の場合はそうではなかったということが出ています。逆に、生徒数が非常に多いという学校もそんなにないということで、福井県の中で平均以上、そもそもできるという学校が非常にたくさんということが福井県の注目すべきポイントかなと思います。

次の丸がずらっと並んでいるグラフなのですが、これは余り見慣れないグラフかと思いますがけれども、横軸に1964年のときの全国学力テストの平均値をとっております。縦軸に2007年の段階での平均値をとっております。各それぞれの丸が自治体を示していて、このときは1964年の段階では返還されていなかった沖縄県と、組合の関係でテストを受けなかった福岡県を除いた45の丸があるはずなのですが、例えばそれぞれをグルーピングして見て、この左下のところであると、1964年も2007年も全国と比べると平均点が非常に低かった自治体であると見ることができます。逆に右上の丸4つのところは1964年も2007年も非常に高い自治体だと捉えることができます。

今日、お話する福井県はどこかというところ、ここに当たります。今回、福井県に注目してお話ししますということなのですが、学力の高さというのは何も今に始まったことではなくて、非常に前から福井県の特徴であったと言えることができるのではないかと、これをまず最初に押さえておきたいなと思います。

ちなみになのですが、どちらにもグルーピングできないというのが一つずつありまして、こちらは秋田県です。秋田県はかつては非常に学力が厳しい自治体だったのですが、現在では注目されるぐらい高くなっている。逆にかつては学力が高かった自治体は今非常に厳しいところにあるというのが大阪府で、非常にこれも注目されているということが挙げられているということを押さえておきたいなと思います。

福井県のお話をするとき、これは私も最初は知らなかったのですが、福井は一概に一

つで福井だと言えるわけではないということを福井の関係者の方には言われまして、地域的には嶺北と嶺南と2つに分かれるということが、まず最初にお伝えしておかないといけないことで、今日は余り嶺北と嶺南の違いについて細かくお話ししないので、嶺北と嶺南の両方を見た中での福井らしさというところでお話しできたらいいなと思います。

福井市、この福井県の中で一番人口の多い福井市は嶺北の方にあります。嶺南はどちらかという関西に近くて、関西の文化圏も少し触れているようなところで、若狭湾、原発がたくさんある地域でもあるというのが嶺南の特徴であります。

お話を内容なのですが、先ほど中公新書ラクレの本をということで紹介をしていたのですが、『福井県の学力・体力がトップクラスの秘密』という本が2014年、ちょうど1年ぐらい前に出ました。その本を書く前に、2013年に福井県で調査をするということで行ったわけです。今度は私一人だけではなくて、先ほど述べた大阪大学の志水宏吉と、あとは大学院生、私以外に3人で入りまして、全部で5人のグループをつくって調査を行った。これまで見てきたような数字で見えてくる福井県みたいなものだけではなくて、福井県の学校教育にはどういう特徴があるのかということを実際に目で見てみようということで、小学校、中学校での子供、教師の様子や保護者の教育観、教育委員会や大学の取り組み等、さまざまな角度から福井県の教育の現状と教育力の高さの要因を探ることを目的として行ったわけです。

結果的には小学校、中学校、教師、地域・家庭という形で4つの形でまとめたのですが、今日は地域・家庭の秘密ということを中心にお話ししたいなと思います。時間が少しあれば、小、中、教師のところにも入っていきたいと考えています。

福井県の子供、先ほどは学力とか体力の話をしましたけど、例えば「自分にはよいところがあると思いますか」と。こちらのスライドは印刷はされていないのですが紹介しておくと、小学校は全国に比べて高い。数値で言うと全国2位。ただ、この辺の数字の差は全国が76に比べて福井が80で、そんなに大きな違いではないです。すごく小さいパーセントの違いなのですが、全国2位。これがこの質問に関する結果です。

それだけではなくて、2015年の段階では「将来の夢や目標を持っていますか」と。これは今、見てみると全国1位です。これはびっくりして、なぜびっくりしたかということ、2007年の調査の始まった当初、「将来の夢や目標を持っていますか」という答えは、福井県の子供は非常に少なく、順位で言うと42～43%という結果が出ていたわけです。それが学力とか体力とかが高いのに福井県の子供には夢がないというのが県の中での課題とされていたのですが、今は1位になった。

これも後にお話をつなげられたらいいなと思うのですが、要は福井県教育が夢カルテというものを作って、例えば大学生とかがする就職活動の際の自己分析みたいなものを小学校4年生から積み重ねていくような教材を作ってやっていたわけです。恐らくそういうものが福井県でやりましようとなったときに、隅々までみんなが一気にやるというふうなことがありますので、そういうところの影響は出ているのではないかと考えているのですが、

この辺もはっきりとはわからないので、今日来られている福井県のことをよくお知りの方に聞いてみたいと思いますが、こういうことも紹介しておきたいと思います。

福井県の地域ということで、一番何が象徴的かなと思って、いろいろな数値を見ていたのですが、よく言われるところで言うと、三世代、同居世代の割合が高いということと、子供のいる世帯に占める共働き夫婦の割合ですね。共働き家庭が多いということで、これは大体全国で自治体ごとでとると相反をします。三世代同居しているから共働きできるのか、共働きをするために三世代同居するのかということは、どちらが鶏か、どちらが卵かという話はなかなかわかりにくいのですが、とにかく福井県はたくさんの方が共働きをしているし、三世代で住む割合も多い。

この数字を見ると大体2割を切っていますが、同居していなくても非常に近隣に住んでいる。スープの冷めない距離みたいところに住んでいる方もたくさんいらっしゃるということで、御親族が近くに住んでいるというのが福井県の大きな特徴です。

この三世代と一緒に住んでいるということが非常に大きいだろうと考えています。まず、生活とか家計が安定するということが最も大きい項目であろうということです。稼ぎ手があるというだけではなくて、子供を見る目。もし両親が例えば働いていたとしても、祖父母が子供を見ているだけではなくて、自分の家だけではなくて、周りの家庭のおじいちゃん、おばあちゃんが普段、日ごろから周りに暮らしている。そういうものが子育ての環境としては非常によいのではないかと考えています。

そして、三世代が住んでいることで、節度みたいなものに子供が接触する機会が多いのではないかということも見えてきました。これは親が子供にということもあるのですが、祖父母から子供に、祖父母世代から孫世代にというふうな節度についての接触ということも、何かこう目上の人と言っていることは聞かなあかんとか、そういうことも相まって、なかなか都会の都市部ではなくなってきたものではないかと思わされます。

こうした異世代交流がもたらす緊張と緩和と書いていますが、例えばルールなどは子供の世代とか孫世代とか、だんだんと社会が変わっていくわけですが、そのときに世代の差によって物の捉え方とか、例えば言葉の遣い方が違うとなったときに、いろいろな緊張関係といいますかね。最近の若者はみたいな、そういうことももちろん含まれるのですが、それだけではなくて、例えば親子関係では言いにくいものだというのも、祖父母を通して子供、孫に伝えることで、親子関係がぎくしゃくするのを少し緩和されるということも、いろいろと話を聞いていく中で出てきました。

本当は自分が言わないといけないのだけれども、おじいちゃん、おばあちゃんが言ってもらったほうが、子供がすんなり聞く感じがするので助かっていますというようなお母さんの声とか、子供を怒るのはおじいちゃん、おばあちゃんの役割にしているとか、それだけではなくて、親が怒ったときにおじいちゃん、おばあちゃんがそれをフォローするように子供をかばってくれるというふうな異世代交流がもたらす緩和というのでしょうか、クッションのような関係ということも見えてきました。こうしたことをひっくるめて、子育て

環境というのが安定しているというのが福井県のまず大前提として押さえておきたいところ です。

今回いろいろなデータを見ていて、意外なデータを御紹介したいと思います。少し小さく くて見えにくいかもしれないのですが、家の人、兄弟姉妹を除くと、学校での出来事 について話をしますかという質問が全国学習状況調査であったのですが、これを見ると 福井県は高いかなと思っていたのですが、実は低くて、数値は非常に差はわずかなので す が、順位にしたら小学校などは非常に低い。中学校は高い方なのですが、というものが出 てきます。

それだけではなくて、家的人是は授業参観や運動会などの学校の行事に来ますかという もの、非常にわずかな差なのですが、順位にすると福井県は非常に低い。小学校で 46位、中学校で44位という結果になっています。教育熱心とか言うと、学校の話とかをし たりとか、学校の行事に参加したりというのがイメージされるのですが、これは恐 らくという感じですが、共働きをされていることが多いから、なかなか学校行事なども参 加するのが難しかったりとか、必ずしも学校の話ばかりはしていないということを示すデ ータではないかと思ひます。

私たちが本を書くより前に、太田あやさんという方が福井県の子育ての教育秘密という ことで、『ネコの目で見守る子育て』という本を書かれています。その本も結構おもしろ くて、福井県の大人の目はネコの目だと書かれていて、つまりネコというのはいつもべた べたしているのではなくて、適当な距離にいて、時々寄ってくる。来て欲しいときには余 り来なかつたりするけれども、ふらっと近くに行ったりとか、そういうような関係性がネ コの目だと太田さんは書いていて、こういうところもあるのかなと。つまり三世代でぎゅ っと密になって暮らしているのもあるのですが、必ずしもいわゆる教育ママとか教育熱心 という感じでもないのかなということが浮き彫りになっています。

ただ、福井県の子供は今、住んでいる地域の行事に参加する割合は比較的多い です。小 学校では全国平均は66.9%なのですが、福井県では82.9%がこういう質問に対して肯定的 に回答している。全国3位です。中学校でも全国で言うと8番目に高い数値になっていま す。

ただ、地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますかとか、地域や社会を よくするために何をすべきか考えることがありますかということについては、全国平均と 同程度の数値です。つまり地域の行事に参加したりはしているけれども、自分は自らの地 域をそんなに大して何ができるかなとか、主体的に関わるようなところというのは、今の ところはなさそうだなというところも見えてきています。この辺がもしかしたら課題とい うことかもしれません。

次は、地域の人と子供たちということで、いろいろなPTA関係の人とか保護者の方とかに 話を聞いていて、すごく印象的な言葉があつて、地域の人はどうですかと印象をざっくり と聞いたのですが、地域みんなで見守っている感じがすごくするので助かります

ということを言う人が多かったです。

具体的に言いますと、一番よく出てくるのは登下校の見守り活動ですね。登校のときは信号とか、信号機のない横断歩道に立ったりとか、下校でたまたま見た学校が、ということですけども、小学校1年生の一番最初の1カ月くらいは地域のお年寄りの方々が小学校1年生を家の玄関まで送り届けるということをしているという学校がありました。だんだんと送り届ける距離を短くして行って、一人でも帰れるように、とかいう形にしていくそうなのですが、そういう手厚いサポートもありました。

ほかの学校でも例えば、地域の方で、ちょっと顔色がおかしいなと思う子供とか、様子が変だなという子供がいたら学校に電話をして、何とか君が心配だから、また先生がフォローしておいてねとか、このペースで行ったら、恐らく学校の決まった時間までに門をくぐれないなというときなどは、何々君がちょっと遅刻しそうなので、門のところであと5分くらい待っていて欲しいみたいなことを地域の方が電話して、登校を見守るというようなこともされていました。

ほかには行事の観客ですね。いろいろな行事があると思うのですが、そういうときに行事のサポートというのものもあるのですが、見るということでもいろいろな人が見にくるので、私が行った学校で遠泳を、海で小学生が長距離を泳ぐのですが、当日もそうなのですが、練習のときから、いろいろな地域の方が本当に文字どおり見学というか、私たちの子供のころもやったよねみたいなことを話しながら、今の子供の様子を見ているというものを目にしました。

ただ見ているだけではなくて、あの子はどこどこさんのところの子供だとか、あの子はちょっとアトピーでいつも海に入った後に水で洗い流しているのだとか、そういう細かい情報なども地域の人を知っていて、そういうことを井戸端会議的なところで話したりして、情報がいろいろ伝わっていくというようなことがありました。

こういう活動とか行事の観客という面では、どこの自治体とか、どこの地域でも多かれ少なかれあると思います。こういう話をすると、うちの学校でもやっているよ、うちの地域でもやっているよとか、うちの地区でもそうだよとか聞くところなのですが、福井県は高いボランティア参加率というのが非常に特徴でして、社会生活基本調査という4年に1回される調査があって、最近では1位というわけではなくなったのですが、10年くらい前にはボランティア参加率が一番高かったですね。特に子供を対象とした活動に参加する人の割合が一番高いということがありました。最近ではいろいろな自治体がこういう取り組みをすところも増えてきていますので、1位ではないのですが、上位にいるということで、量的にも質的にも非常に密接に子供たちを見守っているということがあります。今の子供はどうなのかというのが、地域の人々の関心事ですね。学校の様子もそうなのですが、地域の人々の話題の中で、子供が話題の対象になるということが非常に大きいなと思います。

子供をサポートするとかいうと、一方的に何かメリットを提供しているというふうにも受け取られることもあるのですが、そうではなくて、子供を助けてあげたいとかいう気持

ちはどこかにはあるのですが、やはり自分にとって楽しいとか、子供にいろいろ教えてあげて、子供が喜ぶ顔を見て自分が元気になるのですとか、私がやりたいから活動をしているのですとか、非常にそういうふう話す方も多かったです。つまり、メリットみたいなものが双方向的に行き来しているというのが、ボランティアを続けるという意味で非常に大きい意味を持っているなということも見えてきました。

これは学校についても一緒に、学校に関わるボランティアなども学校のサポートをしてあげたいとか、学校の手助けになればという動機ももちろん多少はあるのですけれども、それ以上に自分が関わって楽しいのですとか、こういう活動をしたら友達がふえたのですとか、一緒に活動する人同士ですね。そういうことが一番の動機になっているところ非常に大きいなと感じました。

地域の役割ということを少し考えをまとめてみたのですが、一つは、子供とか学校を支えるということが非常に大きいと思います。それはさまざまな活動をサポートして、活動はサポートがあるとならないのでは、非常に大きな違いがある。支えるという役割がまず一つ。

もう一つは、知らせるという役割があるなど。学校と地域の橋渡し役と書きましたが、ともすれば学校と地域が対立したりとか、もしくは学校と家庭が対立するとかということは、今は昔に比べると多くなってきているのではないかと思われる方も多いのですが、例えば家庭と学校が対立関係に、トラブルがあるときとかに地域の御意見番的な人とか、PTAの御意見番的な人が間に入ることで多少話が前に進んだりとか、クッションになるということがあったりもします。

それだけではなくて、例えば学校が大変であると。どこの学校もあると思うのですが、子供たちの状況がの中で大変になってしまったときに、ボランティアの人の足とかが遠のくのですね。学校に行っても子供たちが話を聞いてくれへんし、先生とかも一生懸命でないし、関わってもしやあないわ、みたいなふうに思う人がやはり増えてきたときに、学校にずっと関わってくれる地域の人がいるわけです。

そういう人が、地域に流れている学校像というのですかね。学校が荒れているよといううわさはどんどん脚色されて広まっていますから、みんな学校とは距離を置きたがるのですけれども、本当の学校の姿、子供たちとか先生だって頑張っているよ、まだ歯車がうまくかみ合っていないで荒れているだけだよということを、情報発信を学校の中に入っているボランティアの人とか地域の人がどんどんしていくことで、学校と地域をもう一回橋渡しをするということが役割としてあるかなと。

実際に行ったところで、非常に荒れていて、地域から学校は何をやっているのだという声が非常に強かったバッシングを受けていた学校があったのですが、その学校でも継続的に関わっている少数の人たちが、先生たちがどれだけ頑張っているとか、学校が1年、2年たつごとにちょっとずつ良くなっているという様子を地域の人に発信して行って、また、たくさんの人に関わってくれるようになったと、そういった事例もありました。

3点目、これは非常に重要なことだと思うのですが、学校とか子供の活動に地域の人を呼び込むということが大きな役割だと思うのですが、人を呼び込むということはなかなか難しく、いろいろな活動をして、メンバーの固定化とか高齢化ということが進む一方で、なかなか新しい人を取り込むということは難しいということも課題として見えてきたものです。

地域の人とか家庭の人とかがやはり一番よく言うのは、先生は頑張ってくれているのですよ、ということをや非常に言います。これはどういうことかという、無条件に学校とか子供の姿をサポートしているというわけではなくて、やはり学校の中で頑張っている先生がいるから、それに対して信頼して自分たちも関わっているのだということかなと思うわけですね。

先生の頑張りが見えるというところで、特に地域というよりも保護者の声が大きいのですが、生活ノートとか子供の日記みたいなものに対して、先生がたくさんコメントを書きしてくれる。自分の子供はすごくよく見てもらっているのだなと保護者が感じる場面が多いとか、福井県はすごく宿題が多いのですが、その宿題を丁寧にチェックした跡があるとか、もちろん学校行事などで頑張っている姿などを見て、先生は本当に子供たちのために頑張ってくれているのだなと。そこに強固な信頼関係が生まれますので、さらに学校の活動などをサポートする。

さっきは学校のためにサポートをするというわけではないと話したのですが、もともとはそうなのだと思います、それプラス学校のためにという思いも、先生が頑張ってくれているからという思いが、そういう地域の人とか家庭の学校への協力というものをさらに強固にしていくということが言えるのではないかと思います。ちょっと見えにくいかなと思うのですが、子供たちが書いた2学期の目標みたいなところに、先生がコメントを全部張っていつている様子とかがある。

子供から元気ももらっているとか、先生は頑張ってくれているとかいうのを、学校が集める場所として、例えば学校がプラットフォームになって、みたいなことが非常に言われますけれども、学校という場所にいろいろな人の思いを集めることで一つの動きをつくっている。そういう意味で、学校というのは貴重な場所になっているのではないかと考えています。

学校の立ち位置を考えるわけですが、学校は結構中心にどかんとあるというイメージがありますが、福井県を見ていて感じたことは、地域の役割の一つとして学校がある。教育というものは学校だけであるものではなくて、地域とか家庭とかいろいろなところでやる。教育とか学校でしかできないことはもちろんありますが、地域の役割の一つとした、これがそうでないところというのを考えてみたのですが、学校だけしか共有機能を担えないような場所もたくさんあると思います。学校が、勉強もそうだし、生活もそうだし、かなりのことをやらなくてはいけないというような状況の地域もある中で、福井県は地域の役割の一つとして学校があって、それゆえにということなのだと思います、子供を通じて家庭とか地

域とか学校が対等な関係を結んでいたと。

学校が例えば地域からいつもサポートを受けて、あぐらをかいているというようなものではなくて、適度な緊張感があつて、ちゃんとしていないと、学校は何しているのですかということも言われるし、対等に物が言い合える関係でないとだめですよということもそれぞれが思っているということで、変なことが起きないということで、皆さんが力を合わせてやっているということが見えてきました。

今回その学校教育というようなことを考えてみたのですが、学校教育を支えるものとして、福井県の様子を見ていて、社会関係資本という言葉が非常に当てはまるのではないかと。社会関係資本というのは近年非常に注目されていて、いろいろな定義もあるのですが、その論者のパットナムという方がいまして、非常に有名なものがあつて、パットナムが、社会関係資本というのは信頼と規範とネットワークだと言うわけです。社会関係資本は、信頼、規範、ネットワークからなる地域の財産みたいなものですね。そういうものが非常に福井県には蓄積されているのではないかとということです。

1つ目の信頼というところで言いますと、地域の側からすると、学校とか教師に対する信頼というものが非常に厚い。先ほど、学校と教師が頑張っている姿を見て信頼感が強まっているということも挙げたのですけれども、それ以外にも、そもそも福井県民は教育に対する信頼が厚い。いろいろな理由はあると思いますが、一つは教師の社会的地位みたいなものが非常に高いということです。福井県内でエリートと言うのはちょっと変ですが、そういった人は福井大学に進学して、学校の先生になって、先生として働くというものがあつて、先生に対する尊敬のまなざしみたいなものがやはり根強い場所でもあります。というのが大きな点だと思われまます。

2つ目の規範というところですが、やはり勉強とか学業というものを大事にしようという風土が非常に強いということと、お互いさまの精神。真ん中のところに互酬性の規範と書いていますが、つまり消費者的な意識で何か見返りをすぐに求めて何かやるとかではなくて、お互いさまで、そのうち何か返ってくるでしょうという感じで、いろいろな物事がある。これは勉強に対する態度も一緒に、今、勉強をしていることは何の意味があるのかかいうことは、そこでは余り問われないわけです。というよりも、先生が大事だよと言っているから一緒に頑張って勉強しようかなとか、将来的に役に立つのだと信じてやるとかいうのが若者たちの中にも強いのかなと思います。

この規範というところで言うと、三世代が近いということは非常に重要だと思っていて、例えば世代が変わってくると規範は変わってくるのですけれども、親の世代のさらに一つ上の世代がいることで、かつての規範みたいなものが残りやすい、伝わりやすいということも大きいだろうと考えています。

3つ目にネットワークということですが、これは子供を中心としたつながりができているということで、今はお年寄りの方やボランティアの方もそうですが、子供に関わることで、また新たなつながりができる。お話を聞いた学校などでは、もともと子供に昔のいろ

いろな活動を紹介しようみたいなものがあるのですね。子供のそば打ち体験というのをやりましょうということで、地元の方でそばを打てる人が何人か集まってきて、子供に教えるという活動を学校の中でやったらしいのですが、それだけではなくて、その中だけでそば打ちグランプリみたいなものをつくって自由に活動するのが、自分たちの新しい活動に変わっていったみたいなこともありました。こういう信頼、規範、ネットワークというのが十分蓄積されているのが福井県の特徴だし、特に都市部などはこういったものが失われてきていると言えると思います。

子供を中心としたつながりで、子供自身もそうですし、学校そのものが支えられているというのが福井県の地域的な大きな特徴であろうと考えています。こうした動きに小学校とか中学校とか学校の先生の熱みみたいなものが乗っかっていって、非常に子供の学力とか体力とかが高まっているだろうというのは、私たちの考えた一つの結論であります。

時間もあれなので、ぱっと流していく感じになるのですが、小学校の一日の見通しとか授業の流れが非常に分かりやすい設計をされていて、見ていて勉強になるところが多かったのですが、例えばこちらの写真を見ると、それぞれ時間割りというのを次の日用に書くわけです。明日の時間割りは1時間目が国語で、2時間目は算数とか書くのですが、それぞれその中に、その授業の前半はこういうことをしますとか、その授業の後半はこういうことをしますみたいなことを全て書いていく。これは別に全部の学校でというわけではないのですが、こういう学校もあったと。総じて、こういうふうなスタンスが福井県には共有されていると思うということで紹介しました。

授業づくりの中でも、授業自体はオーソドックスな感じではあります。導入で今日の「学習のめあて」というのが示されて、子供が問題を解いたり、いろいろな活動をする。最後にまとめていって振り返りをするという形がオーソドックスではあるのですが、一様にいろいろな先生がいますけれども、みんなそういうふうに行っているということが大きな特徴であります。

体力の話も少ししておく、見た感じだと体育の授業内容はすごく濃かったです。運動量が確保されていて、見た授業の中でも、1年生などでも休む時間がないぐらい45分走りっぱなしみたいな感じの授業をしていて、それでしんどいとかやる気のないとか言う子もいなくて一生懸命みんながやっている。授業だけではなくて、業間マラソンですね。休み時間中のマラソンとかいうのも日常的にやっていました。

見た学校の中では、20分の休みがあるのですが、必ずその20分の休みには学校の外に走りに行く。学校の運動場ではなくて、外を走って、商店街の中をずっと走っていくのですが、普通の場合、学校は外に子供を出すことはリスクが高いもので、子供がいなくなったりすることもあるし、何か事故に巻き込まれたりすることもあるのですが、その学校では商店街の中を子供が走るということをずっと続けられていて、そういうのも地域の人目があってこそ活動かなと思います。そういういろいろな形で子供たちの運動量が非常に確保されている。

この左下の写真はグーパー体操という握力を鍛えるための運動で、これは何でこの写真を載せているかということ、ちょうど行ったときは、福井県内の子供の体力で何が高いかということ、握力がかなり高いと言われていたわけです。どういうことかと言いますと、体力テストは瞬発力とか柔軟性とか、いろいろな分野とか領域があるのですが、その中で握力が全国の中でも8位でした。ほかは全部非常に高い順位なのですが、握力だけが8位で、握力を鍛えなければいけないから、全部の学校でグーパー運動をしましょうということを県教委が提案するわけです。そうすると、これは非常に大きい特徴だと思いますが、全ての学校できっちり、それをするということが大きな特徴です。つまり、県教委がやりましようと言うと、それが市教委に行って、それぞれの学校にスムーズに浸透する。一番最初にお話しした県内での一体感とか一貫性みたいなことも非常に大きいなと思っています。体力とか忍耐力とか、総合的に子供たちを鍛えるというものが、福井県を見ていて大きく感じたところですよ。

右上は放課後学習の一コマということで、福井県内のテストがあるのですが、福井県独自でやっているテストの前の補習といいますか、勉強会をしているということも紹介しております。勉強会だけではなくて、先ほど見通しを立ててということがあったのですが、計画を立ててやりましようということなども非常に多いなと感じました。

中学校もこの辺はどこでもそうかなという感じですが、朝は少し早くて、7時半くらいから登校を始めるとか、8時には全員が教室に入った状態にいるのですが、多くの生徒が部活動に参加している。とにかく生徒が学校で過ごす時間が長いということもおもしろいです。やっていること自体は当たり前というか、誰に聞いても当たり前のことをやっているだけなのですよとおっしゃるのですが、朝学習をしたりとか、宿題を出して小テストをするとかということが、当たり前ではあるのですが、この当たり前を徹底してやるというのがやはり大きなところだと考えます。

生活指導なども非常にきっちりして、これなども典型的ですが、かばんとかファイルなどをロッカーにしまっていくのですが、中学校でもきちんとこれはここに入れるということが決まっていて、こういうところでちょっとのずれも許さないというか、ちょっとのずれもなくしていこうというスタンスでやります。

清掃時なども非常にきっちりやっていて、福井県で有名なのは、永平寺中学校の無言清掃というのがメディアの方も結構取り上げられていて有名なのですが、たまたまこの学校は生徒会が永平寺中学校の掃除を見学しに行ったらしくて、その無言清掃を覗いて、私たちがやりたいということで、やりましようという取り組みの中のひとつで、この写真ですが、これは掃除を、ぞうきんがけは大体前にばつと行くことが多いのですが、自分がいるところの後をふいていくような形で、後ろに下がりながら、ぞうきんがけをしていく様子です。

とにかく学習にしてもそうですし、生活にしてもそうですが、とにかくきっちりとずれとか、できていないところがないようにしようということが徹底されているというところですね。この辺はどこの学校でもということではないのですが、掃除を見ていて先生方が

チェックして回って、それぞれの掃除の持ち場のMVPみたいなものを決めましょうみたいな形で発表されるわけです。自分の名前があったら生徒側としてはすごくうれしいですし、なかったら頑張ろうと思うかどうかは分かりませんが、とにかくきっちりやったことに対する評価はしっかりしているというのが福井県のスタンスであるように思います。

それだけではなくて、この写真も見にくいですが、先生が縛ってやるというだけというよりも、生徒が自主的にやりたいということを非常に大事にしているなどと思います。この辺は校外学習を成功させるためにどういうふうにするか。まずは100%ルールを守るとか、100%自主学習を提出するとかということを目下の目標にして、校外学習の成功のために取り組んでいきたいと思いますということを生徒が主体でやっているということです。きっちりやると余り言い過ぎると、先生に縛られて大変だろうと思うのですが、どちらかと言うと生徒が独自に主体的に取り組むことを大事にしているのだろうと。

これも別の学校なのですが、清掃をきっちりやろうということで、例えば4分前に場所を移動するとか、到着したら2分後に何をするのか、7分間は何をするのか、細かい掃除の流れが書かれている。これも生徒主体でやっている活動ですけれども、主体であるということと、何をすべきかということ非常に学校の中で明確に示していて、これなども時間ごとにこういうことをしたらいいとかということを示している。

これは余り大きい話ではありませんが、例えば特別支援教育などの関係でも、発達障害傾向のあるお子さんに見通しをもって活動に取り組むとか言われていますが、非常にそういったところも近くて、何をすべきか、何をすれば評価されるのか、何がよいことなのかということが非常に明確であることが多い。その中で、最初に言ったように学力的に取りこぼされる子供なども少ないのではないかと感じました。

当たり前というものが、きめ細かい丁寧な指導によって生み出されているということと、学校全体で取り組む。小学校も中学校もそうですけれども、学校全体で一つのことを徹底することが足並みを乱さないみたいなのを生み出しているのだろうということが見えてきています。

これは今までの文脈とは少しずれるのですが、余り触れていなかったところで、福井県は実は1951年から県独自の学力テストをやっています。体力テストも1963年からやっていて、その結果に基づいて、今後の課題とかをあぶり出して、取り組みにつなげていくということをもう何年も前からやってきて、これも福井の教育文化を生み出しているなど。さっき一番最初のときに、子供たちが夢や希望を持っているというのが全国1位だったということに非常に驚いたというお話をしたのですが、もともとは低かったけれども、それを分析して夢カルテというものを作って、恐らくやって子供たちのこの数値が高くなったのだろうということを想像しているわけなのですが、こういうところにもチェックして、弱点であるところを強化していくみたいなのにつながっているなどと思います。

最後になりますが、小学校教師の出身学校というところで、皆さんにお配りしているのは真っ白になってしまっているのですが、上が福井県で、下が全国の公立学校の数値です。

左から教員養成系の大学を出た人で、福井県は78%になっているところは、教員養成系の大学を出た人。その右側の14.1は一般系の大学院・大学を出た人。一番右側は一般系の短大とかその他を出た人で数字自体は少ないのですが、ということを示したグラフです。

こう見ると福井県の特徴はほかにも、どちらかという都市部ではない、大学がそんなにない地域の特徴と言った方が正確かもしれませんが、やはり教員養成系の大学とか短大を出ている人が非常に多いということが特徴です。教員養成系を出たから何なのかと議論もあると思うのですが、そもそも入る時点で先生になりたいと思って入る人が恐らく多いだろうということが言えるのかなと思います。

こちらは中学校ですが、中学校も同じように、小学校よりもさらに顕著にとった方がいいかもしれませんが、教員養成系の大学とか短大を出た人の割合が非常に多いということに気づかれると思います。

教員養成系大学出身者が多いというだけではなくて、複数免許、例えば小学校、中学校が両方あるとか、中学校と高校があるとか、特別支援教育の免許を持っているとか、そういう複数免許の取得率も高いというのが大きな特徴です。かつては小中一括採用みたいなことをしていて、両方の免許があった方が採用されやすいのではないかみたいなことを言われておったのですが、今はより専門性を高めようということで、そういう一括採用はなくなったのですが、やはり小中一括採用の影響があったのかどうかはわかりませんが、複数免許取得率が高いです。

それは何がいいのかということですが、やはり幅広い勉強をして先生になっている人が多いということは、例えば小中連携というのが今は盛んに言われていますけれども、その辺で全然知らないというよりはスムーズなスタートが切れたりとかしているのではないかなということも思います。年齢構成なども40代の年齢層が今は非常に分厚いということであったり、教職員組合の加入率も非常に高いです。そういうのが教師集団としてのまとまりを生み出しているということも福井県の教師の大きな特徴かなと思います。

福井の先生の特徴はと聞いたら、福井県の人みんな、とにかくまじめということを使うわけですね。まじめな人が多いとか、さっき挙げたように、全体が一体感みたいのが非常に強いので、先生によるばらつきというのが小さいように感じます。これは個人的な印象ですが、変な言い方をすれば、先生の当たり外れみたいなものが少ないだろうと。そういう事実自体が学校とか教育に対する信頼を損なわないことにもつながっているのではないかなと思いますが、実際はどうかはわかりませんが、そういう印象を持っています。一生懸命な人とそうでない人の差が少ないみたいなことをおっしゃるわけですね。

このまじめさは何なのかということをもとめて、詳しくはできれば本を読んでいただけたらと思いますが、授業の中でもきちんと教える。どういうところがポイントで、どういうところをやらなアカンのかということをしつかり明確にしているということ。研修などにも非常に熱心に参加されている。宿題とか生活ノートを非常に丁寧にチェックしている。組織の一員として動く。これは学校の中でということなのですが、先ほどから何度も申し

ているのですけれども、県の教育委員会がある施策を出したときに、学校の先生の隅々に行き渡ってやれるというのが福井県の大きな強さです。まじめさとはこういうものだろうと思いました。

これは参考程度と思って出したのですが、ちょっと見にくいのですけれども、2013年でそれぞれの学校で宿題を出していますかと。国語なのですが、例えば「家庭学習を与えましたか」というような質問に対して、小学校ですが、福井県は大体9割くらい、全国は8割くらいが「よく行った」、「どちらかと言えば行った」の2つを足すとほぼ100%になりますが、小学校は余り大きな違いはないわけです。

しかし、中学校の下のほうを見てみると、「家庭学習を与えましたか」で、福井県は「よく行った」が8割くらい出っていて、全国とは大きな差がある。中学校になると宿題を出すのは教科担任の先生だったりするので、そういうばらつきも出るのかなと思いますが、福井県はそれに加えて、各担任の先生が生徒に出す問題集みたいなものを出したりとか、教科の担任の先生が出す宿題と担任の先生が出す国語の宿題と両方あったりとかして、すごく充実しているなど思うこともありますが、そういうこともあります。

「家庭学習の評価・指導しましたか」というところに関しても、福井県は全国に比べけると非常に高い数字で、「よく行った」ということが出ています。やはり出しても出しっぱなしではなくて、それをきっちり評価する。できていなかったら指導をするということ徹底してやっている。また、それをできる子供たちだとか、やっていないと何でやらないのかという家庭があったりとかというのが、福井県の学力の高さにつながっているのかなというところです。

福井の教育のキーワードで、群れる力と鍛える文化というものが端的にあらわしているのではないかと考えています。群れる力というのは、最近、特に都市部などでは各個人がばらばらになっていて、人のつながりがなくなっただけではなくて、ともすれば、人とのつながりなどはない方がいいとか、わずらわしいとか、そういう声もあったりするのですが、そうではなくて、しっかりとあたかも群れをつくるように機能している。地域の中でもそうですし、学校の中でもそうですね。群れるということ余りいい響きではないかもしれませんが、一緒になって、その中で切磋琢磨しながら、みんなで一緒にやっというものが福井県の中では非常に紡がれている。

それに加えて、それを前提としてと言う方がいいかもしれませんが、学校とか家庭の中でもある程度そうかもしれませんが、特に学校で子供たちを鍛えるというのが非常に強いなど。勉強などでも宿題もたくさん出して、確実にやらなければ放課後とかも残らされたりとかいうこともあったりするのですが、それだけではなくて、運動面でもそうですね。いっぱい走らせたりとか、泳がせたりとか、子供たちに対して妥協しないと言えばいいのか、求めるハードルを下げないという意味で、非常に子供たちを鍛える文化があるなど思います。鍛えるのを成功するのは、やはり群れる力が前提にあることだと思うのですが、これが福井の教育のキーワードかなと思います。

ここまでは福井県のよさばかりを話していたつもりなのですが、課題というのも幾つかあって、簡単に4つにまとめてみたのですが、1つは個性の問題ということで、いろいろと話を聞いていると、特に先生の中では、いろいろな先生がいてもいいのに、みんな同じような感じで、飛び抜けた先生とか、おもしろいことをする先生とかが少ないような感じがするというのは福井の先生の出てきた課題の大きな一つなのですが、調査に行くと子供たちが何で来たのですかと聞いてくるわけです。

ある生徒が、何でこんなところに来ているのと聞いてきたので、福井県の子供たちが非常に勉強ができるし、学校でどんなことをしているのか気になって調べに来たんですと答えたら、福井県なんて来ても意味ありませんよとその生徒は言って、何でと聞いたら、福井県なんて、みんな同じような人間しか育たないし、オリンピック選手になるような人もいないし、ノーベル賞もないし、芸能人もたくさんいないからということを使うわけです。

狙いとしてはそこが実は狙いで、みんな、ある程度の底上げができていくということに福井のすごさがあると思っていたのですが、突出した子みたいなものが生まれにくい風土とか土壌ではあるのかなと。ただ、ノーベル賞とか出ないわけではないのですが、実際に有名な方もたくさんいらっしゃいますけれども、全体としてはそういう印象がある。その中で個性みたいなものをどう育てていくかというのが大きな課題になっています。

2つ目、不登校率の高さも書きましたが、最近は改善されてきていますが、小学校に比べて中学校や高校で不登校率がやや高くなっている。この辺は今まで見てきたように、学校の厳しいやり方とか、家庭で学校に行かなければいけないとか、地域でも学校に行かなければいけない、教育は大事だという規範的なところに当てはまらない児童・生徒がいた場合に、その辺がしんどさを感じて不登校につながってしまうということも、もしかしたらあるのかもしれない。最近は非常に不登校対策もしっかりされていて、やや改善の兆しは見せていると理解していますが、それも課題かなと思います。

3つ目は、1番ともつながりますが、教師のまじめさというところは、いいところでもあるし、裏返せば、おもしろい先生が生まれにくいこともあるかもしれない。

4つ目が、地域の持続性ということです。この地域の持続性というのは、別に福井県だけではないと思います。日本全国どこでも見られるかなと思うのですが、私は大阪の人間ですが、大阪から見て福井県の地域は非常に安定しているし、落ち着いたところだなと思うのですが、福井県の人からすると、何年か前に比べたら余裕みたいなものがなくなってきたと。子供もすごく忙しいし、何か生活がばたばたしているというお話も聞きまですし、先生方から見ても、昔は保護者とゆっくり話をしたりする時間があつたけれども、最近はそういうものもなくなってきた、なかなか顔を合わせて話ができないというものが増えてきたということもおっしゃっている人がいました。

社会の中で余裕が失われてきて、今までの地域を持続していくこととか、特に地域の活動などで現有メンバーの入れ替わりというのがうまくいっていない。私は30年ぐらいずっ

とこの会の代表をしていますとかいう人がいるのですが、なかなか世代交代がうまくいかない。それは産業構造の変化による人の移動とかいうのが出てきて、今までとは変わってきたというところで、例えば最近、福井県の中小企業、繊維産業、眼鏡とか、いろいろあるのですが、そういうところも全部中国とかその他の外国、海外の工場で作られたものとの競争、グローバルな競争に福井県内も巻き込まれていて、その中でどうやっていいのかということが非常に問題になってきている中で、それに加えて嶺南地方の方であれば、原発の問題が大きくて、これから原発がどうなるか。原発が稼働するか、しないかということに関わって、仕事があるか、ないかということにも直結していきますので、子供には残って欲しいけれども、残れとは言えないというような声も聞くところでした。その中で、地域をどういうふうに持続させていくかということが大きな課題だなと思います。

一番最後になりますが、福井の事例から、私たちは何を学んだらいいのかなというところで、『希望学 あしたの向こうに』という本があって、これは福井県を題材にして書かれた本なのですが、玄田さんというのは東京大学の先生ですが、福井県は日本人にとっての心の名風景とも言うべき場所である。これは風景もそうですし、その地域の文化とか規範とか、そういうものを含めてとか、人口問題研究所の阿部彩さんなども、統計データから見る福井は古き良き日本だという文章を載せていたりするのですが、失われた日本とか、かつての日本がそっくりそのまま残っているという状況が福井県にはあるわけです。

そういう状況の中で、失われたもの、例えば都市部にはそういうものはないのだとあきらめて、福井の事例は関係ないとするのではなくて、その中で新たなつながりとか信頼とかをどういうふうに生み出していくことができるか。そのために子供とつながったり、つながっていく子供でいろいろな大人がつながっていくことが、かぎとなるのではないかと書いたのですが、見にくくなってしまいました。これは地域の行事に参加するかというものを横軸にとって、縦軸に地域や社会で起こる問題や出来事に関心があるかというものの相関を見てみたものです。

全体で都道府県一つ一つを並べてみると、地域の行事に参加する子供が多い地域の自治体ほど、地域のことに関心がある子供が多いという、そういうような関係が出てきているのです。地域にも子供たちが参加したりとか、地域と関わることで地域と社会に対して関心を持ったりとか、その関心を持つことが、ひいては社会を変えていこうとか、よくしていこうという行動であったりとか、考えて行動につながるのではないかというふうにも思います。ですので、こういうふう新しいつながりとか、子供を含めてつながっていくことが、次の世代の社会を支えることにつながるのではないかと考えています。

ちょっと長くなってしまったのですが、私からは以上です。御清聴ありがとうございました。（拍手）

質疑応答等

○司会 それでは、皆さん、申しわけありません。名刺や意見交換をいただいているところ、誠に恐縮ではございますが、そろそろ質疑応答の時間に移らせていただきたいと思います。

私の方からマイクを持って各島を回らせていただきますので、御意見であるとか御質問をどなたかにしていただいて、前馬先生にはその都度というよりは最後にまとめてコメントをいただければと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

それでは、こちらの島の方から、どなたか一人だけ、まとめてコメントであるとか御質問を御披露いただければと思います。よろしくお願い致します。

○出席者 まだ議論が始まったばかりで申しわけありません。それぞれ不登校の若者たちをどういうふうに社会へ復帰するかということに取り組みまわっていたり、少年鑑別所で非行に走った生徒さん、子供さん、若者たちの学力、体力をどんなふうに現場に戻していく。また、受け入れるということは非常に難しい状況で、窓口を広げた外来トークというのを始めたけれども、多分そこから今日の話の中でプラットフォームだったり、そういうようなことが何か地域でできないかということ参考にしていきたいということ。

あるいは福祉ソーシャルワーカーさんで、もう一步、先に進んで考えられている方なのですが、この群れる力というのは教育では、この群れるということ逆を捉えて、それは管理になってしまわないで、本当にいい意味での群れるというのは、先生はどんなふうにお考えだったのだろうかというような話が出ておりました。

○司会 ありがとうございます。

それでは、次は後ろの方の島でどなたか、先ほど手を挙げられている方がいるかと思いましたが。

○出席者 私はすごく素朴な質問なのですが、私は東京の江東区に住んでいる者なのですが、今はマンションラッシュで江東区がすごく人口が増えて、50万人を超えたと思うのですが、福井市の方では学校の1クラスの人数と全校生徒の数、それをお聞きしたいなと思ひまして、こんなに完璧に全てまじめに取り組んで妥協しない、そういう教え、まじめさ、そういうところではどのくらいの人数の生徒数があるのかなと思ひて、ちょっとお聞きしたいなと思ひました。

○司会 では、後でまとめてということをお願いしたいと思います。

次はこちらの方の島でどなたか御意見であるとか、御質問とか。

○出席者 お願いします。文部科学省で教科情報の調査官をしておりますカノウと申します。昨年まで石川県教委におりまして、福井県を目指しておりました。

3つあるのですが、先生方のモチベーションが非常に高いと思います。その理由はこういふことだというのもしあれば。指導力が高くて授業がしっかりしているの、こういうような形ということになると思います。学校は授業が基本ですから。その後、やはり研

修などもされておられるのかなど。そこら辺の状況がもし分かれば、お願いしたいです。

最後の一つは、宿題評価をやりたけれども、なかなかやれないのが先生の現状なのですけれども、学習指導以外の時間も圧縮しているはずで。その仕組みであるとか、こういうふうになっているとかいうのがあれば、教えていただきたいと思います。

以上です。

○司会 ありがとうございます。

それでは、次に後ろの方の島でどなたか意見であるとか、質問であるとか。

○出席者 お疲れさまです。福島県の教育委員会から参りましたヤマモトと申します。

お聞きしたかったのですが、一生懸命に頑張る福井の先生はまじめだということで、精神疾患率みたいなものはどうなのか。非常に今、問題になっているところがあるので、まじめさがゆえにというところで、異常はないのかなという気がします。そこを1点とりあえず、お願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

こちらの島の方から、お願いします。

○出席者 群馬県の総合情報教育センターから参りましたナガイと申します。お世話になります。

今、群馬県でも40代が少なく50代が多くて、それが一気に増えた後はどうしようかということで研修を急いでいるところなのですけれども、福井県を見ますと、40代がかなりはっきりしていると。以前にも、ほかの講演会で聞いたことがあるのですけれども、福井とか秋田は臨時の先生の率が低くて、指導力が高いということだそうですけれども、福井県の方も10年、20年で、もしくはいなくなった場合、かなりその辺を心配なさっているということも聞いたのですけれども、その辺の関係で福井県の方はどういうふうに考えているのかという話を聞かせていただければと思います。

○司会 ありがとうございます。

ほかにこの際ですが、これだけはぜひ聞いていたいという方はおられますでしょうか。

○出席者 ありがとうございます。この中で不登校についてお話がありまして、今は若干不登校率も低下してきているということなのですけれども、不登校といじめの関係性について、もし何か分かることがございましたら、教えていただければと思いますので、よろしくお願いします。

○司会 ありがとうございます。

たくさん御意見であるとか御質問をいただきました。本日、前馬先生が直接、既に調査研究や成果とかデータを把握されているかは分かりませんが、前馬先生の方で可能な範囲でコメントなりであるとか、お話をいただければと思います。

○前馬氏 たくさん質問をいただいて、どこまでお答えできるかは分からないのですけれども、できる範囲でお答えできたらと思います。

群れる力の意味ということでおっしゃっていただいたところで、人間というものそもそも

もは動物で、群れというか、共同体の中で暮らしていくというのがある程度、動物的本能と言ったらおかしいかもしれませんが、余りにも今はそれが失われ過ぎているのではないか。子供が同世代とか異世代とかが近くで一緒になって遊ぶのが今はなくなってきているという状況の中で、そういうところのよさをもう一回取り戻してみませんかという提案になればという意味での群れる力という意味です。

群れのおきてみたいなのを全面に打ち出すというよりも、どちらかというところ、失われてきた子供のつながりとか、いろいろな世代が一緒になって過ごして、外的な脅威に対して一つになって力を合わせるみたいなのところのよさを福井県の教育とか風土に見たと、そういう感じで理解していただけたらと思います。

福井県の学校の人数ということで、これはいろいろあります。福井市などは割と人口が多い大きい学校もあるのですけれども、そうでないところに行くと非常に小規模な学校もたくさんありますが、こういう質問も来るかなと思って、さっき文科省のラウンジで福井の教育という冊子をとってきたのですけれども、ここの中に福井県独自の少人数教育ということで、要は学級定数を減らすということをしてされています。福井県は小学校1～2年生で35人学級。低学年生活支援員の配置を31人以上の学級ですとか、3年生で35人、4年生は40人ですが、平成27年度には35人にすると書いてあります。5～6年生では36人。中学校1年生は30人、中学校2～3年生では32人というふうに、かなり手厚い教育が行われているということです。これは恐らくインターネットとかでも見られると思いますので、また、御覧いただけたらと思います。

やはりどこの学校も少子化してきていて、本当に子供が少ない中で、数的に地域のお年寄りとか子供がマンツーマンぐらいの学校とかもあつたりするので、そういうのが地域の人々の見目が逆に多いということにもなっていますが、大きい目で見たら子供が少なくて、この地域は大丈夫かなという心配もつながつたりするという、見守っていく関係かなと思いますけれども、そういうところがあります。

先生のモチベーションが高い理由ということなのですが、モチベーションが何で高いかということとははっきりとは分かりませんが、教師というものに対する職務のイメージというか、職務とはこういうものであるというのが、そもそもそういうものであると。つまり教員の仕事は授業をしっかりとやるとか、これだけしっかりとやらなければいけないとか、上から下りてきたものはしっかりとこなすのだという、それが教師の仕事であるというものが共有されているというのが一つかなと思いますし、やはり地域とか家庭からの期待というのが高いと思います。この辺は推測ですが。

指導力の高さに関して研修というのは、はっきりとはこれは答えられないのですけれども、自主研修とか教員同士の研修会をしないとか、近くのブロックみたいなのところでの研修会は割と盛んだとは聞きます。ただ、具体的な内容とかについては、今お答えできるものはありません。

3つ目の宿題評価以外は時間の圧縮ということですが、一番感じるのは、これも福井だ

けではないと思いますけれども、生徒指導課題が多くない。細かくはたくさんあるのでしょうけれども、例えば放課後に地域を家庭訪問して駆け回ったりとか、いろいろな生徒が学校帰りで起こしたトラブルに対して対処しているとかというのは、比較的少ないのではないかということの一つ挙げられます。もう一つは、ほかで言うと、休み時間とか先生が常に丸つけをしたりとか、そういう姿は見えます。先生は丸つけをしているか、授業をしているかというようなイメージを持っています。

精神疾患率は、これは数字は分からないのですけれども、それは問題があるということは今のところ聞いてはいないので、もしかしたら、そういうのもあるのかもしれないので、ちょっと調べてみたいなと思いますが、今お答えすることはできません。

ミドル層、40代が多いということは今はいいのですが、やはり福井県の先生などは、10年後が来るよということでは言っていて、それに対しての危機感なども非常に持たれている。それに対して、ということではないのですけれども、例えば教員研修などで10年研と教頭の研修などを一緒にドッキングさせた形で研修をしたりとか、意識的に違う世代の人たちが一緒になるような研修などもして、世代間の確執みたいなものをできるだけなくそうみたいなことは取り組まれていましたが、それが年齢構成の変化というのを見越してのものかどうかというのは分かりませんが、違う世代での話ができるような環境をちょっとでも作りたいということで、そういう研修も3年ぐらい前から始められているということがあります。

最後の不登校率といじめの関係で、これも今は手持ちのデータがないので、お答えできないのですけれども、どうなのか今はっきりとは申し上げることができません。

一応これで全部の質問にざっと答える形になったかなと思うのですが、いかがでしょうか。

○司会 ありがとうございます。会場の皆さん、前馬先生に拍手をお願いしたいと思います。

(拍手起こる)

○司会 以上で第3回研究会は終了とさせていただきます。皆様、御出席いただきまして、ありがとうございました。